【報告】

丸山薫先生顕彰を考える会「薫会」活動報告

愛知大学文学部文学科　昭和 62 年卒　**久野　かおる**

はじめに

本稿では、まず「丸山薫先生顕彰を考える会」発足の経緯を記し、次に「丸山薫先生顕彰を考える会」の勉強会として始まった「薫会」（第 2 回に本名称に変更）発足の経緯およびその活動内容を報告する。

筆者は愛知大学女声合唱団の OG であり、「丸山薫先生顕彰を考える会」の発足時に発起人と同席し、その後「丸山薫先生顕彰勉強会」（発足時の名称）に賛同、第 1 回の集まりから参加している。

1．丸山薫先生顕彰を考える会の発足

「丸山薫先生顕彰を考える会」発足の経緯と趣旨を以下にまとめる。

2019 年 12 月 15 日（日）に愛知大学短期大学部創立 60 周年記念事業として愛知大学短期大学部同窓会実行委員会主催により同学部教授 安智史先生の講演会「詩人丸山薫と『梢の歌』の世界」が開かれた。「梢の歌」は愛知大学短期大学部の学生歌であり、丸山薫先生が作詞されている。本講演の内容は、安智史「丸山薫と愛知大学短期大学部学生歌『梢の歌』をめぐって」（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.28』所収）で確認できる。

同日、旧短大本館跡地において「梢の歌」詩碑建立除幕式が行われ、愛知大学名誉教授 藤田佳久先生が旧短大本館の歴史を紹介したパネルの内容と QR コードの解説をされ、愛知大学女声合唱団 OG が「梢の歌」を合唱した。これらについての詳細は山口恵里子氏が愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.28』（2021 年）に「短期大学部学生課『梢の歌』の石碑や旧短大本館の建物を紹介したパネルの設置に関わって」を投稿されている。また、同書 p.269－p.270 には詩碑設置や除幕式などについての新聞記事も掲載されているので、参照願いたい。

上記、「梢の歌」詩碑建立をきっかけに、2020 年 7 月 18 日、「本間喜一先生顕彰会」（本間喜一先生は愛知大学創立者・名誉学長）のご寄付により旧短大本館跡地（「梢の歌」詩碑の近く）に「丸山薫と愛知大学短期大学部学生歌『梢の歌』」のプレートが設置された。そして、同日、「本間喜一先生顕彰会」名誉会長 越知専氏のご提案により「丸山薫先生顕彰を考える会」が発足した。発起人は代表 越知専氏、倉橋健二氏、林桂輔氏、清水宏子氏、藤城佐知子氏で、安智史先生と筆者は発起人と同席していた。

発足の趣旨について越知氏は次のように考えていらっしゃった。「丸山薫先生は現代詩に影響を与えただけでなく、愛知大学で教鞭を執られた。この地方の小・中・高校の校歌を数多く作詞され、豊橋まつり音頭や鬼まつり音頭なども手掛けていらっしゃる。

広く多くの人々に先生の偉業を知ってもらいたい。詩碑の建立やプレートの設置にとどまってはいけない。顕彰は継続してこそ意味がある。」

その後、「丸山薫先生顕彰を考える会」は2020年10月21日に「丸山薫賞」受賞者・出席者を贈呈式後、愛知大学豊橋キャンパスに招待し、詩碑や直筆原稿の見学会を実施した。「丸山薫賞」は1994年、豊橋市が丸山薫没後20年を機に創設し、毎年丸山薫先生の命日（10月21日）に「丸山薫賞贈呈式」が開催されている。

２．丸山薫先生顕彰を考える会「薫会」

２－１．「丸山薫先生顕彰　勉強会」の開催

前述の2020年10月21日以降、「丸山薫先生顕彰を考える会」の活動はコロナ禍のため休止していた。しかし、2022年3月、発起人の藤城佐知子氏（昭和42年、女子短期大学部卒）の働きかけに志摩じゅん（雅号）氏（昭和43年、文学部卒、在学時は丸山薫先生顧問の文学研究会に所属）が賛同し、毎月第一月曜日の13時半から15時半に愛知大学豊橋校舎記念会館1階「ガーデンサロン」において丸山薫先生の詩を読む集まり「丸山薫先生顕彰　勉強会」を開くことになった。

会の趣旨は、「丸山薫先生顕彰を考える会」の活動として月に一度の集まりを開き、愛知大学同窓生以外の皆様にも参加していただき、丸山薫先生の作品を通して、先生の人となりに触れ、先生を偲ぶ、集まった方々と意見交換を楽しみながら丸山薫先生を顕彰する場としたいということであった。よって、特定の指導者による講義や研究を目的とした会ではなく、会費（資料代等）も無料である。

筆者は愛知大学女声合唱団の先輩である藤城佐知子氏から「丸山薫先生顕彰　勉強会」開催のお知らせをいただき、「丸山薫先生顕彰を考える会」の活動再開に心が躍った。藤城氏とは以前から丸山薫先生の50回忌（2023年10月21日）に向け、女声合唱団OG会として何かできないかと話していたので、会の事務局となってくださった藤城氏、志摩氏に感謝し、両氏のサポートをしようと決めた。

２－２．「薫会」の名称と内容

2022年4月4日、第1回「丸山薫先生顕彰　勉強会」が開かれた。そして、第1回の中で、藤城佐知子代表が参加者に会の名称のご検討をお願いし、2022年5月2日、第2回の中で「薫会」と改名された。

また、「薫会」の内容についても、毎回、会の初めに参加者の紹介や情報交換などの時間を設け、毎回テーマと話の進行役を決め、テーマに関わる丸山薫先生の詩を提示し、参加者一同で朗読したり、自由に感想を述べたり、意見交換をする、他の会では取り上げられないと思われるテーマ（合唱曲など）も楽しみたいということを確認した。

さらに、2023年10月21日に丸山薫先生の50回忌を迎えることから、「薫会」の活動の中で法要ができればという話もあった。

２－３．2022年度「薫会」活動報告

表1に2022年度「薫会」のテーマと話の進行役を示す。＊は配布資料・参考資料である。なお、本稿は2022年12月26日現在のため、第10回から第12回のテーマは変更の可能性があることをご承知いただきたい。

表１　2022（令和４）年度　丸山薫先生顕彰を考える会「薫会」

回	開催日	テーマ（太字）　　＊配布資料・参考資料	話の進行
第１回	４月４日	**会の発足と丸山薫先生の紹介** ＊「丸山薫略年譜」（愛知大学丸山薫の会編『丸山薫の世界』所収）、「汽車にのつて」（『新編丸山薫全集1』所収）（女声合唱曲も紹介）、「唱歌」・「燕はとんでくる」・「小鳥の歌」（『新編丸山薫全集２』所収）、安智史「丸山薫と愛知大学短期大学部学生歌『梢の歌』をめぐって」（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.28』所収）、久野かおる「丸山薫先生を偲んでー師の印象と学生への温情ー」（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.29』所収）、久野かおる「丸山薫先生を偲んでー詩と音楽の融合ー」愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.30』所収）	藤城佐知子
第２回	５月２日	**愛知大学文学研究会と「愛大文学」、春の詩** ＊「愛大文学」13 号・14 号・15 号・16 号、丸山薫先生直筆の色紙（寄せ書き）の言葉・「春しんかん」・「早春」・「晩春」（『新編丸山薫全集３』所収）、「市、豊橋公園の名称変更へ」（2022 年４月 15 日付中日新聞）	志摩じゅん 藤城佐知子
第３回	６月６日	**詩と音楽の融合①**→荒天で参加者５名のため次回に延期 ＊藤田佳久先生の愛知大学の歴史と豊橋の話、「これでいいのか！－伊勢湾台風によせてー」（『丸山薫全集３』所収）	久野かおる →藤田佳久
第４回	７月７日	**１．フルート演奏　２．詩と音楽の融合①** ＊「お月様」・「お山の學校」（『丸山薫全集１』所収）、「愛知大学男声合唱団第２回定期演奏会パンフレット（1965 年 12 月 12 日）・CD」、「落葉松」・「梢の歌」などフルート演奏	尾崎順子 （フルート演奏） 久野かおる
第５回	８月１日	**詩と音楽の融合②** ＊「コンパスづくし」・「キヤプスタン」・「わが窓に」（『丸山薫全集１』所収）、愛知大学男声合唱団第２回定期演奏会 CD、「曲と詞」（『丸山薫全集４』所収）	久野かおる

第 6 回	9 月 5 日	**詩と詩の鑑賞** ＊「青い色」・「青い色」・「緑の中に」（『丸山薫全集 3』所収）、「詩の鑑賞法」（『丸山薫全集 4』所収）、学校図書編『小学校　国語　五年上』（1975 年）、久野かおる「宿題」（1976 年 9 月 19 日付朝日新聞「小さな目」）	久野かおる
第 7 回	10 月 3 日	**１．丸山薫の母を詠む詩　２．中原中也へのオマージュ** ＊「母の傘」・「詩人の言葉」（『新編丸山薫全集 1』所収）、「母を憶ふ」・「ほんのすこしの言葉で」（『新編丸山薫全集 2』所収）、「母を呼ぶ」（『新編丸山薫全集 3』所収）、岡崎純「～『母の傘』朗読～」（豊橋市役所文化課発行「丸山薫　ランプの灯りに集う」1 号所収）、「中原中也の詩について」・「私と詩友」17 章（『新編丸山薫全集 4』所収）、中原中也「汚れつちまつた悲しみに」（佐々木幹郎『中原中也 悲しみからはじまる』所収 みすず書房 2005 年）	岡田滋代
第 8 回	11 月 7 日	**詩誌「四季」の歴史　①四季と丸山薫の評価　②中原中也の存在－詩人を生むもの、詩人の根底にあるもの** ＊岩本晃代『昭和の抒情詩』（双文社出版 2003 年）「第二章＜四季派＞の抒情＞」、福永武彦他編「太陽」（平凡社 1975 年 10 月号）「特集 青春抒情詩集」、「中原中也の思い出」（小林秀雄『作家の顔』所収 新潮社 1961 年）	岡田滋代 志摩じゅん 藤城佐知子
第 9 回	12 月 5 日	**１．中田島砂丘とクリスマスの詩　２．丸山薫先生顕彰を考える会について　３．第 1 回からを振り返って　４．詩の朗読　５．フルート演奏** ＊「そんな眺めが……」・「砂丘を歩む－中田島砂丘で＜Ⅰ＞－」・「千鳥－中田島砂丘で＜Ⅱ＞」・「御前崎灯台廻廊で」、「海早春」・「水平線」（『丸山薫全集 2』所収）、「十二月二十四日」（『丸山薫全集 1』所収）、「リンゴの中」・「たのしい前夜」（『丸山薫全集 3』所収）、久野かおる「聖夜のひとりごと」、久野かおる「丸山薫先生顕彰を考える会『薫会』について」、藤城佐知子「『薫会』令和 4 年を振り返って」、「汽車に	久野かおる 志摩じゅん 尾崎順子 （フルート演奏）

		のつて」・「河口」・「母の傘」（『新編丸山薫全集 1』所収）、「唱歌」（『新編丸山薫全集 2』所収）、「春しんかん」（『新編丸山薫全集 3』所収）、「お月様」（『丸山薫全集 1』所収）、「愛知大学男声合唱団第 2 回定期演奏会（1965 年 12 月 12 日）CD」、「雪が降る」などフルート演奏	
第 10 回	1 月 16 日	**1．「水の精神」2．詩誌「風紋」について　3．「風紋」の前身「原像」の会について** 「水の精神」（『新編丸山薫全集 1』所収）・詩誌「風紋」（第 20 号記念誌）	市橋のん 丸山まつよ 藤城佐知子
第 11 回	2 月 6 日	**1．丸山薫先生直筆の葉書二通・手紙一通紹介　2．「愛について」** ＊「愛について」・「白髪」・「秋」・「食卓」・「山裾の家」（『丸山薫全集 3』所収）、「ランプのやうに」・「言葉なき愛」・「愛嬌ある妻」（『丸山薫全集 2』所収）、丸山三四子『マネキン・ガール　詩人の妻の昭和史』（時事通信社 1984 年）	藤原佐知子 久野かおる
第 12 回	3 月 6 日	**丸山薫先生と星野昌彦先生** ＊未定	河邉満江

以下に第 1 回から第 9 回までの内容を記す。表 1 と合わせてご覧いただきたい。

＜第 1 回＞

記念すべき第 1 回は藤城佐知子代表から参加者への謝辞と会の発足、会の進め方、活動日時について説明があった。参加者の自己紹介の後、藤城氏から配布資料を基に丸山薫先生の略歴について紹介があった。

詩の朗読は、今月のテーマは春の詩とし、「汽車にのつて」などを朗読して意見交換をした。女声合唱曲「汽車に乗って」の CD も聴き、軽やかで明るい音楽に詩のイメージを膨らませた。

終わりに、藤城氏から会の名称についてはいかがか、「勉強会」では固い感じがするのではという声かけがあり、参加者全員で名称を検討することになった。次回までに各自が名称を考え、投票で決めることにした。開会記念に集合写真（写真 1）を撮影して終了した。

写真 1

＜第 2 回＞

参加者の近況報告等の後、志摩じゅん氏が在学中に所属していたサークル「愛知大

学文学研究会」と発行紙「愛大文学」についてお話された。志摩氏は丸山薫先生が寄せ書きをされた色紙をお持ちくださり、参加者は先生直筆の「青春は実在せず」を見ることができた。「愛大文学」も回覧された。

筆者も「丸山薫先生を偲んでー師の印象と学生への温情ー」（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL. 29』所収 2021 年）の記述を基に、「愛知大学文学研究会」と「愛大文学」について紹介した。

詩の朗読は、藤城氏が春をテーマに「春しんかん」などを取り上げ、皆で朗読した。「春しんかん」は吉田城址を詠んだ詩で、2022 年 4 月 15 日付中日新聞に豊橋公園の名称変更について記事が載ったこともあり、活発な意見交換となった。特に、「しんかん」がひらがなで表記されていることに対して、「しんかん」の意味や言葉のリズムなど考えることができた。

終わりに、第 1 回の宿題となっていた会の名称変更につき、参加者から案が出され、投票の結果、次回から「勉強会」を「薫会」という名称に変更することに決まった。

＜第 3 回＞

当日は風が強く、荒れた天気となってしまった。開会時刻になっても藤城氏、志摩氏、筆者の 3 名だったため、今月のテーマは次回に持ち越すことにした。3 名で学生時代の話をしていたところ尾崎順子氏（昭和 43 年、女子短期大学部卒、在学時に女声合唱団所属）が到着され、短期大学部学生歌「梢の歌」など女声合唱団の思い出話に花が咲き、尾崎氏からフルート演奏のご提案があった。

その後、藤田佳久先生が強風のため止まっていた JR 飯田線がようやく動いたからと駆け付けてくださり、豊橋、豊川、牟呂用水、中田島砂丘など歴史的・地理学的に貴重なお話をしてくださった。ありがたい時間となった。

＜第 4 回＞

参加者の近況報告の後、前回、尾崎氏からフルート演奏のご提案があったので、初めに尾崎氏が女声合唱曲「落葉松」と短期大学部学生歌「梢の歌」のフルート演奏をしてくださった。参加者の中には「梢の歌」を初めて聴かれる方もいらっしゃったようで、「梢の歌」に触れる良い機会となった。

詩の朗読は、筆者が「丸山薫先生を偲んでー詩と音楽の融合ー」（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.30』所収 2022 年）で述べた「お月様」と「お山の學校」を取り上げた。皆で朗読し、意見交換した後、愛知大学男声合唱団第 2 回定期演奏会（1965 年 12 月 12 日）の演奏を聴いた。この演奏は丸山薫先生が客席で聴かれた演奏であることも申し上げた。参加者からは詩が音楽になることによって、言葉のイメージが広がるという意見があった。また、「お山の學校」の第 4 段は前段までと画面が変わり、終戦（天皇陛下のお言葉）をイメージさせるという話になった。丸山薫先生が何をお考えになっていたか思いを巡らし、皆で理解を深めることができた。

＜第 5 回＞

参加者の近況報告の後、前回のテーマに続き、男声合唱曲となった丸山薫先生の詩「コンパスづくし」、「キヤプスタン」、「わが窓に」を朗読した。前回取り上げた詩は丸山薫先生が疎開されていた山形県岩根沢の子供たちを描いた作品であったが、今回は

先生が実習船に乗船された時の実体験を描いた作品である。「コンパスづくし」には先生が船での生活を楽しんでいる様子、「キャプスタン」には生き生きとした船乗りの姿、「わが窓に」は長旅の途中、船室から海原を眺める心情が詠まれている。

前回と同じく愛知大学男声合唱団第 2 回定期演奏会（1965 年 12 月 12 日）の演奏を聴いた。各詩のイメージを膨らませる曲調に皆、静かに耳を傾けた。

丸山薫先生のエッセイ「曲と詞」も紹介し、作曲者に対する先生の思いに触れた。

＜第 6 回＞

例によって、参加者による近況報告の後、『丸山薫全集 3』所収の二編の「青い色」を朗読した。一編は筆者の小学校 5 年生当時の国語教科書に載っていた詩である。実物の教科書を回覧し、筆者の小学校 5 年生当時の担任が詩を作る宿題を課していたこと、学級会の投票で選んだ詩を朝日新聞に投稿してくださっていたことを紹介した。

二編を朗読し、未知の海に飛び立つ子つばめの覚悟に子供たちへのメッセージを感じた。また、燕について参加者から有意義なお話を伺うことができた。

さらに、「詩の鑑賞法」という文章を紹介し、教科書に取り上げられる詩の鑑賞についての先生のお考えに触れた。

続いて、「緑の中に」という詩を朗読し、この詩を朗読するときはどのように読むべきか、言葉や朗読に対する先生の厳しい解説も読んだ。

＜第 7 回＞

参加者による近況報告の後、まず、「丸山薫の母を詠む詩」のテーマで三編の詩「母の傘」、「母を憶ふ」、「母を呼ぶ」を順に朗読し、意見交換した。各詩から先生の深い愛情を感じた。

次に、「詩人　中原中也へのオマージュ」のテーマで丸山薫先生の「詩人の言葉」、「ほんの少しの言葉で」、中原中也の「北の海」、「汚れつちまつた悲しみに……」を朗読。「中原中也の詩について」を資料に、丸山薫先生と中原中也の交流について、二人の出会いや詩誌「四季」のことなどお話があった。あるがままの中原中也を受け入れた先生の寛大さ、大らかさが話題となった。

次回も岡田滋代氏が引き続き詩誌「四季」と中原中也を取り上げることになった。

＜第 8 回＞

参加者による近況報告の後、前回に続き詩誌「四季」と中原中也が取り上げられた。

まず、岡田滋代氏から詩誌「四季」の歴史について、丸山薫という詩人に対する評価と「四季」における中原中也の存在に焦点を当てたお話があった。丸山薫にとって異質な存在と思われる中原中也が「四季」に所属していたことに「四季」の懐の深さが感じられた。

次に、志摩じゅん氏が小林秀雄と中原中也の複雑な関係に焦点を当て、小林秀雄の著書『作家の顔』から「中原中也の思い出」を志摩氏、岡田氏、藤城氏が輪読し、中原中也の悲しみについて考えた。志摩氏は詩を生むもの、詩人の根底にあるものを深く考えていらっしゃった。

丸山薫先生の詩は志摩氏の蔵書「太陽」（1975 年 10 月号）に掲載の「河口」（『新編丸山薫全集 1 』所収）が紹介された。

＜第 9 回＞

参加者の近況報告の後、丸山薫先生が中田島砂丘を詠まれた詩を朗読した。この詩

を取り上げたのは、第 4 回、第 5 回で紹介した愛知大学男声合唱団に所属していた中内康博氏が中田島砂丘の写真集を出版されることになり、藤田佳久先生が解説文を書かれるということを筆者が聞き、写真集の最後に二編の詩「砂丘を歩む－中田島砂丘で＜Ⅰ＞－」、「千鳥－中田島砂丘で＜Ⅱ＞」を載せていただくことになったことによる。どちらの詩も雄大で、参加者から『月渡る』という第十四詩集に収録されていることにも意味があるのではという意見が出た。

続いて、クリスマスの詩「十二月二十四日」、「リンゴの中」、「たのしい前夜」を朗読した。参加者から「リンゴの中」の「五人の黒い王女たちが／いま　しずかに眠っています」は、りんごを横に切ると、種が五つある様を詠んでいる、童話に出てくるお姫様たちを思わせるという意見が出て、なるほどと納得した。「たのしい前夜」は、昭和 23 年当時の日本に「サンタ・クロース」、「X マス」が浸透していたのか疑問だという意見もあったが、ご両親からクリスマスプレゼントをもらったというお話もあった。丸山薫先生の時代を捉えた言葉のセンスが光る詩である。

筆者の詩「聖夜のひとりごと」を紹介した後、あらためて丸山薫先生顕彰を考える会「薫会」発足の経緯を紹介し、「薫会」の第 1 回からを振り返った。そして、第 1 回から取り上げた詩の中から「唱歌」などを朗読した。「お月様」、「汽車にのつて」は CD で合唱曲も聴いた。「春しんかん」はやはり最後の「歴史しんかん」が重く響く。

最後に、尾崎順子氏によるクリスマスにふさわしい「もみの木」、「雪が降る」などのフルート演奏を聴きお開きとなった。

２－４．2023 年度「薫会」活動予定

表 2 に 2023 年度「薫会」のテーマと話の進行役を示す。

表２　2023（令和５）年度　丸山薫先生顕彰を考える会「薫会」

回	開催日	テーマ（太字）　＊配布資料・参考資料	話の進行
第 13 回	4 月 3 日	**１．今年度の「薫会」について　２．青春について** ＊「青春について」・「若者と馬と」・「不利の中に」（『丸山薫全集 2』所収）、「春の夜」（『丸山薫全集 1』所収）	藤城佐知子 久野かおる
第 14 回	5 月 1 日	未定	未定
第 15 回	6 月 5 日	未定	未定
第 16 回	7 月 3 日	未定	未定
第 17 回	8 月 7 日	未定	未定
第 18 回	9 月 4 日	未定	未定
第 19 回	10 月 2 日	**丸山薫先生 50 回忌法要　於：正太寺**	大河内悟道
第 20 回	11 月 6 日	未定	未定
第 21 回	12 月 4 日	**今年を振り返って**	藤城佐知子
第 22 回	1 月 15 日	未定	未定

第 23 回	2 月 5 日	未定	未定
第 24 回	3 月 4 日	未定	未定

表 2 でテーマ未定と記した所では、参加者とも相談しながら、薫先生と戦争、愛知大学の教員としての思い、丸山薫と萩原朔太郎、薫先生と岩根沢－詩碑への思い、薫先生作詞の校歌、薫先生と動物たち、薫先生と音楽、詩と音楽の融合③・④などを取り上げていきたいと考えている。

第 19 回は、丸山薫先生が眠る真宗高田派正太寺（豊橋市牛川町字西側 16）の大河内悟道ご住職に 2023 年 10 月 2 日（月）13 時半より 50 回忌法要の件、快諾を得ている。お寺の本堂（寄付者の芳名）には丸山薫先生と三四子夫人のお名前が掲げられている。「薫会」と愛知大学女声合唱団 OG 会合同で「梢の歌」を合唱し、丸山薫先生を偲ぶことができれば幸いである。

おわりに

丸山薫先生顕彰を考える会「薫会」はまだ始まったところである。皆で声を合わせて詩を朗読し、意見交換することは実に刺激的で心地良いことだと思っている。

「薫会」の専らの懸案は、参加者を増やすことである。毎月第一月曜日の平日午後開催では、在職中の皆様にはご参加が難しいと思うが、何とか愛知大学在学中の皆様にご参加いただくことはできないものか、思案しているところである。会を継続するために引き続き検討していきたい。

謝辞

「薫会」の事務局として毎月ご準備くださる藤城佐知子氏、志摩じゅん氏に心より感謝申し上げます。また、ご多忙の中、「薫会」にご参加くださる藤田佳久先生に深く感謝いたします。ありがとうございます。

参考文献・引用文献・参考資料

桑原武夫他編『丸山薫全集 1~5』角川書店 1976 年～1977 年

岩本晃代・安智史編『新編丸山薫全集 1~6』　角川学芸出版 2009 年

愛知大学丸山薫の会編『丸山薫の世界（丸山薫作品集）』2017 年

越知専『愛知大学－本間イズム実践編－日々是新 令和に託して』豊橋合同印刷株式会社 2021 年

山口恵里子「短期大学部学生課『梢の歌』の石碑や旧短大本館の建物を紹介したパネルの設置に関わって」愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.28』所収 2020 年

久野かおる「丸山薫先生を偲んで－師の印象と学生への温情－」愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.29』所収 2021 年

久野かおる「丸山薫先生を偲んで－詩と音楽の融合－」愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.30』所収 2022 年

久野　かおる（くの　かおる）

昭和 62 年　愛知大学文学部文学科国文学専攻卒業

昭和 63 年　愛知大学文学部文学専攻科国文学専攻修了
平成 10 年　愛知大学大学院文学研究科日本文化研究コース修士課程修了
平成 13 年　愛知大学大学院文学研究科日本文化研究コース博士課程満期退学
令和 4 年 12 月現在　学校法人茶屋四郎次郎記念学園 東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科主任講師